
「箱男」 in グラインドハウス

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「箱男」 in グラインドハウス

【Nコード】

N5878L

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

いやあ、箱の中は良いよ。みんな幸せになれるから。このままずっと居座りたいね。

（前書き）

グラインドハウスとは

B級映画を複数立てて放映する映画館のことらしいですよ。
ここでは適当でB級な小説を自分が楽しめます。

僕は箱の中で生きていた。

突然声が聞こえたんだ。

箱の中で生かしてあげると。

最初は何のことか分からなかった。

だけど、暗闇の中で暮らすことだってことは理解できた。

周りは真っ暗だけど、怖くはない。

むしろ暖かい気分になれるんだ。

しかも、色々なイメージが僕に流れ込んで、世間と呼ばれる人間の営みだっってわかるんだよ。

世間ってのは人間と呼ばれる生き物達が生活してるん世界なんだ。その世界で僕はダンボールっっていう箱として生きてるんだっって。聞こえてくる声が教えてくれた。

生きてるんだからもちろんお腹も減るさ。

でも空腹になったら、食べたい物を想像すれば、おいしいうってい感情が僕を包み込んで、いつの間にか満腹になっっちゃうんだ。

おいしいうってい感情はとても嬉しいんだ。

僕は普段、人間の暮らしを見つめている。

参加はしない。

何か物足りない気持ちになると「大丈夫」と言う声が聞こえるんだ。

そうすると、満腹になったときみたいに満たされるんだ。幸せになれる。

それに参加したところで、何をしたらいいか分からないし。
今のままで満たされているから良いでしょ？
この箱の中にいれば何も恐れるものはない。
すべてが満たされるんだ。

そんなある日、何か外から叩く音が聞こえたんだ。

「ねえ、開けて頂戴。私をいじめる人に追われているの」
でも僕は答えることができなかった。

正確には僕の意味が伝わらなかった。

「じゃあ、中は無理でも箱の陰に隠れさせて」
箱の陰でやり過ごしているのは一人の女の子。

世間では小学生って呼ばれている部類の人間だ。

「私の名前は中川空^{なかがわそら}ていうの」

いきなり自分の名前を名乗った空ちゃんは色々な話を話してくれ
た。

学校や家出の出来事。

学校ではいじめられっこに終われる毎日。

家では好きな漫画ばかり読んでるんだって。

「でね、箱男くん……」

「そしたらね、箱男くん……」

一方的に話をする空ちゃん。

僕に箱男という名前をつけてくれた。

なんだか彼女の話の聞いていると暖かい気持ちになるんだ。

今までも似たような気持ちになったけど、違うんだ。

「幸せ」ってという言葉がしっくり来るんだ。

でも、話をしている途中、何度も「来た……」という空ちゃんの
声が聞こえると、彼女は震え出した。箱まで震えが伝わってきたん

だ。

そして小学生と呼ばれる集団の足音が遠ざかる。すると、空ちゃんはいつの安堵の声を上げた。

空ちゃんが緊張する集団は二つあって、それぞれ彼女を探しているようだった。

あれから何日か経ったある日。

「えいつ」

空ちゃんが一言発すると、暗闇の世界に二筋の光が差し込む。

ま、眩しいっ！

「目を開けてみたんだけど……どう？」

確かに突如暗闇に二つの丸い小さな穴が開いていた。

目？ どういうことだろう。僕には良く分からない。

さらに穴からの光が遮断されると、黒くて丸い何かがこちらを覗いていた。

「うーん、さすがにこの穴からは中身が見えないか……」

黒くて丸いものはどうやら空ちゃんの瞳だったらしい。

こうしてわけの分からないまま、僕には光が差し込むようになった。

ゆっくり、意識を光に近づける。

すると丸い光から色々なものが見えてきた。

黒いアスファルトの道路。高くて大きいビル。一定の距離を置いて生えている電柱。

そして……

髪を左右に束ねた、瞳が大きくて、こちらへ微笑んでいる女の子。空ちゃんだった。

それから何度目だろうか。

空ちゃんは乱暴な声を上げる集団に見つかってしまった。

彼女の声が悲鳴と共に遠ざかっていく。

空ちゃんを助けたい。

本気でそう思ったんだ。

でも……僕はこの暗い箱から出ることができなかったんだ。

空ちゃんの姿をそれ以来見る事はなくなった。

僕はしばらく、光の穴を覗くことができなかった。

邪悪な存在に連れて行かれた彼女は……

ああ……

なんで僕は何もできなかったんだ。

怖い、情けない……そして、辛い。

「あははは……」

不意に僕の耳へ空ちゃんの声が届く。

これはイメージじゃなくて本物の声。

え？ 本物の声？

イメージの声とどう違うんだろう。

でも、確実に違う、心が溶かされるような声。

僕は急いで光の穴を覗き込んだ。

目の前の道路を空ちゃんが笑いながら歩いてた。

彼女の姿に僕は安堵した。

それと同時に目に入ったもの。

……空ちゃんが数人の人間と一緒に歩いている姿。

こつち向かって歩いている。

なんだろうこのウキウキするイメージは。

彼女が近づく。

ドキドキ、ドキドキ

さらに近づく。

ドクドクドクドク。

ああ！ やつと目の前に！

——え？

なんで？

……通り過ぎちゃうの？

本当に楽しそうに歩く空ちゃん。

でも、僕には目もくれずに立ち去っていく空ちゃん。

とても楽しそうだった。

みんなに囲まれていた。

幸せそうに見えた。

アレが本当の幸せなのかもしれない……

それから僕はまた暗闇の底に沈んだ。

目を瞑れば、空ちゃんのイメージが沸いてくる。

すごく都合が良いんだ。

彼女がいるような暖かな気持ちになれるんだ。

肌と肌が触れているような感覚になるんだ。

一人じゃないんだ。

話もできるんだ。

満たされているんだ。

ああああ……全体が……満たされていく……
あははははは……へへへ……気持ち良いなあ……
僕の中に液体があるなら、すべて零れそんな感覚。
幸せだなあ……

幸せすぎだなあ
……

ふへへへへ……とろけそう……

もう……ぼ……ああ……
♪ p ん じ ぴ う ♪ p ん ぽ う

う あ あ あ あ
あ 消えろあぶぶぶ
う ……

あばばば……ぶえ死んでへへへええええええ……

$\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & i \\ -1 & i \end{pmatrix}$
 $\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & -i \\ 1 & i \end{pmatrix}$

もう幸せすぎた……

ぼぶぶぶ b b い う う
う う う う う
う

がんじゅじゅじゅじゅ殺してじゅじゅじゅ……
……なあむむびゅ

-
-
-
-
-
-

幸せすぎた。

ひゆる死ねよるるう……あは♪……えへへへポンプ……

ぐぐぐぐぐううううぬぬ
ぬぬう！！
ぬはああっ
♪

はあっはあっはあっはあっはあっ
皆死ね
はああkもちいいいいいいあ

あああつっ
.....

[illegible]

•
•
•
•
•
•

はあああああああ
.....

もう、狂いそう。

「亜ーファイk h j j あ j g のさ r j ゃ き j f はおし d r」

どれだけ声を上げて、耳障りで掻き毟るような音と液体交じりの濁った音しか聴こえない。

何で僕は叫びたいのだろう。

皆が幸せじゃないか。

空ちゃんは幸せそうだったじゃないか。

僕も今は幸せじゃないか。

でも……

……

……

…

誰か……誰か……

誰かあああああつ！！

——ん？

あそこにある明かりは何？

丸い穴が開いている。

空ちゃんが空けた穴じゃないか。

僕はゆっくり近づいた。

恐る恐る穴を覗いた。

そして見えたんだ。

空ちゃんがまた今日も皆と歩いているすがた。

なんなの？ その笑顔。

ねえ、僕を置いていかないでよ。

ねえ、僕も仲間に入れてよ。

ねえ、聞こえないの？

誰か

誰か

誰か

誰か

だれかああ……

誰？

私は君を作ったんだ」

アナタはどうして僕を生かしてくれているのですか？
ここから覗くことに何の意味があるんですか？

ここにいれば安全だよ。ずっと生きられる』

でも、こののぞき穴を突き破れば、あの明るい世界へ行けるんだよね。

あの人たちと楽しく暮らせるんですよ。

死ぬよたぶん。君じゃあ耐えられないと思う」

それでも……

それでも！

飛び出したい！

抜け出したい！

逃げ出したい！

僕は光に向けて意識を集中した。

何か光にぶつかるイメージのあと、

一瞬の押し戻しがあった……

全てが開放された。

「きゃああああああつ!!」

「うわっ、なにこれ気持ち悪い……」

「うげえええっ……げばおっ……」

「空、大丈夫？ とにかく警察に電話っ！」

ねえ、空ちゃん。

僕を見て食べ物をつき出してるの？

ははは、噴水みたいで面白いや。

歓迎してくれてるの？

でも、この鼻が曲がりそうな液体は何？

臭いよ、汚いよ。

なんで、こんなことするの？

なんで？

あれ？ 目の前に広がる赤い液体は何？

ヌルヌルとしたピンクや赤黒い塊は何？

僕を見つめているあの球体はなに？

皆と同じように飛び出したのに。

僕だけが……

あはははははは………

- - - - -
- - - - -
- - - - -

正午のニュースです。

今朝、通学途中の高校生が、箱から飛び出した人の内臓らしき臓物を発見しました。

発見者の話によれば、突然段ボール箱が破裂し、内臓が飛び出たと言っ話です。

箱の中や周辺にも体に当たる部分がなく、警察は別の場所に体を

遺棄した事件とみて捜査中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878/>

「箱男」 in グラインドハウス

2010年10月8日14時56分発行